

東京からこんには

静岡市にゆかりがあり、東京を拠点に内外で活躍する皆様に、東京から見た静岡市の良さの可能性、まちづくりの方向について、ご提案いただきます。

アホウドリ完全復活 絶滅危機救う

東邦大学名誉教授
動物生態学

長谷川 博さん



Hiroshi Hasegawa

静岡市葵区生まれ。県立静岡高校卒業。京都大学農学部卒業。京都大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学(動物生態学)、日本学術振興会奨励研究員、東邦大学助手、助教授、2004年、教授に就任。08年、京都大学野生動物研究センター・兼任教授、14年4月から東邦大学名誉教授。70歳。「風にのれ!アホウドリ」(フレーベル館)、「オキノタユウの島で無人島滞り」「アホウドリ」調査日誌」(偕成社)など著書多数。第3回海洋立国推進功労者表彰・自然環境保全部門(内閣総理大臣賞)など数々の賞を受賞。
<https://www.mnc.toho-u.ac.jp/v-lab/ahoudori/>

活動42年「やりきった」

かつて無数にいたという伊豆諸島の鳥島の特別天然記念物アホウドリ。しかし羽毛採取による乱獲で一時絶滅宣言(1949年)が出されるなど、戦後の長い間絶滅の淵にあった。この危機を救ったのが長谷川さんだ。

現地調査125回。40年以上、毎年無人島の鳥島に渡り生態研究と繁殖成功率をアップさせる活動を続けた。時には一人で1か月半も滞在した。昨秋、1011つがいを確認。「総個体数は5165羽(推定)となり、完全復活の目標としてきた5千羽に達しました。もう鳥島の集団

は自分の力で存続できます。やりきったという感じですね」。

長谷川さんは優美なアホウドリを尊敬の念を込めて「オキノタユウ」(沖の大夫)と呼ぶ。鳥島に渡る決意を固めたのは、大学院博士課程1年の時に鳥島の調査を終えた英国の著名な鳥類学者と偶然大学で出会ったからです。

日本学術振興会の奨励研究員だった76年に現地へ。だがこの時は波が高く、翌年島に初上陸。ヒナ15羽と若鳥成鳥71羽を確認した。直後に東邦大学助手に採用され、保護研究に。丈夫な巣を造れるように従来営

巣地に草を植え、安全な斜面に新たな営巣地を造成にも着手、島の北西の比較的平らな場所と従来営巣地近くの崖の上に新営巣地ができ復活への道が開けた。昨年末、活動を後進に譲り、今は講演などが中心。

田舎の新しい価値を

旧大河内村出身の長谷川さん。静岡市について「山の景観と現代的な都市とがうまく融合、調和したまちになってほしいですね」と話す。

実家近くの有東木地区は、日本のワサビ栽培発祥の地とされ、「水わさび伝統栽培」が国連食糧農業機関(FAO)の世界農業遺産に認定された。「市内には水わさび以外にも井川のメンパなど伝統工芸品が多くある。こうした伝統技術や栽培方法を継承するシステムづくりも重要だと思えます」と指摘。

「都会の子どもたちに新茶の時期の、あの山一面を覆うお茶の香りを体験してもらおうとか、文化・歴史遺産と野鳥観察など自然が楽しめるスポットや、自然をうまく活用した人と触れ合える場所を紹介するネットワークみたいなものができたら、田舎の新しい価値が見つかるのではないでしようか」。

(文:長田義明、写真撮影:長谷川さん)